

回復期リハビリテーション病棟生みの親 石川 誠先生を偲んで

2021年5月24日朝、当協会顧問であり、
リハビリテーション医療の父とも称される石川誠氏が逝去した。
享年74歳。生前の多大なる功績に敬意を表し、
親交の深い当協会役員による追悼文と
追悼座談会で氏を偲ぶ。



One for all, all for one
One for all, all for one

<石川 誠 略歴>

- 1973（昭和 48）年 群馬大学医学部卒業 群馬大学医学部
脳神経外科研修医
- 1975（昭和 50）年 佐久総合病院 脳神経外科医員
- 1978（昭和 53）年 虎の門病院 脳神経外科
（虎の門病院分院リハビリテーション担当医員）
- 1989（平成 元）年 社会医療法人近森会
近森リハビリテーション病院 院長
- 2000（平成 12）年 医療法人財団新誠会 理事長
- 2002（平成 14）年 医療法人社団輝生会 理事長
- 2018（平成 30）年 医療法人社団輝生会 会長

< 役職 >

- 回復期リハビリテーション病棟協会 相談役
- 日本リハビリテーション病院・施設協会 顧問
- 日本訪問リハビリテーション協会 相談役
- 日本リハビリテーション医学会 専門医 名誉会員
- 藤田医科大学医学部 リハビリテーション科 客員教授

石川 誠先生を 偲んで

澤村 誠志

日本リハビリテーション病院・施設協会
名誉会長



「障害をもっていても人間らしく」 脳神経外科からリハ医に

石川誠先生のあまりにも突然の訃報に接し、心の整理ができないでおります。我が国のリハビリテーションの様々な分野での偉大なる実践的なリーダーを失ったことは誠に残念で、いまだに信じられません。

私が初めて石川誠先生にお会いしたのは1989年、高知の近森リハビリテーション病院（以下、近森リハ）でした。そのきっかけをつくってくれたのは、医療法人輝生会の事務局長として長年石川先生を支えてこられた森本栄さんでした。

森本さんは、兵庫県立総合リハビリテーションセンター（以下、兵庫リハ）の創成期に勤務されたあと故郷の高知に帰り、石川先生を頼って近森リハに勤務されていました。その彼が兵庫リハの私のところに来られ、「うちの石川院長は、土日の休みを利用して、自転車で往診している」「多くの厚生省の医系技官が近森リハに来られている」との情報をいただき、瞬間的にこの石川誠という人物に会いたいと感じました。

私は生来、国内外を問わず、何か先駆的な行動をしている人物がいれば、すぐにお会いしたくなる習性があり、翌週は高知に飛んで行きました。

石川先生は、ラグーマンらしい「ワンチーム」を基本とした素晴らしい情熱と先見性をおもちで、何よりも近森リハでの看護・介護と、リハビ

リテーション職員の多職種協働の実践に驚嘆しました。特に、私が最も苦手とするリハビリテーション医療現場の診療報酬の細部まで精通されていることには、強い感銘を受けました。

石川先生がリハビリテーション医学を選んだ背景には、群馬大学の研修医時代、脳神経外科教室での手術後に残った障害に対するリハビリテーションの重要性が理解されず、むしろリハビリテーション医療が軽視されていた現状への怒りがありました。しかし、卒後2年目に長野県の厚生連佐久総合病院に赴任され、若月俊一院長が示す徹底した農村地域医療の素晴らしさに目覚められたことが、生涯における最大の転機となりました。

「病気が治らなくとも、障害をもっていても、人間が人間らしく生きるにはどうしたらいいのか。これを支援するのがリハビリテーション医療ではないか」。この考えから、脳神経外科、臓器医療専門家の道と訣別され、虎の門病院分院で“奇人変人扱い”を受けながらも、リハビリテーション医として、看護師、介護職、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーたちと、チームを機能させる体制づくりに取り組まれました。

ちょうどその頃、私は、兵庫県立身体障害者更生相談所所長として、兵庫県下の多くの障害のある人々の巡回相談をとおして、その生きざまから多くを学んでいました。リハビリテーション中核

センターとして兵庫リハの設立が必要と考え、「医療、社会生活力、教育、職業、バリアフリーのまちづくり」の5つの柱によるセンターをつくりつつありました。石川先生と同じ道を歩いていたと思います。

回復期リハ病棟の設置など功績は多い

1989年に全国のリハビリテーション病院に呼び掛けて、日本リハビリテーション病院協会が設立されました。なぜか私が主張した地域リハビリテーションシステムが協会の主題として取り上げられ、担当副会長としてつとめ、3年後に思いがけなく会長職に就任しました。

私にとって最も重要と考えていた課題は、同じ理念のもとに、一緒に汗をかける同志、特に執行部となる副会長・事務局長の人事でした。そこで、すぐに石川誠という稀有な人材に執行部としての参加を呼びかけ、いきなり理事から副会長職をお願いいたしました。

そして、すでに我が国の地域リハビリテーションの先駆者として研究会を起こされていた大田仁史先生と、私の先進国訪問の仲間であり地域リハビリテーションをライフワークとしておられた浜村明德先生の3人による副会長体制を整えました。事務局長は、私の神戸医大（現神戸大学）時代に熊本大学から研修に来られ地域リハビリテーションに興味をもたれていた、熊本機能病院の米満弘之先生にお願いし、強力な執行チームを形成することができました。

私が、すぐに石川先生にお願いしたことは、医療保険・診療報酬とともに、2000年より開始した介護保険の担当でした。それとともに、厚生労働省における「廊下トンビ役」をお願いしました。行政を動かすには、医政局、老健局や社会・援護局の専門官を含めて、リハビリテーション医療の現場のデータを提供すると同時に、どうすればリハビリテーション医療サービスの向上に結び付ける

ことができるか、お互いの信頼関係の形成が大切と考えていたからです。

これは私が義肢装具の領域において長く廊下トンビの役割を果たす中で、義肢装具士の国家試験制度の創設をはじめ、ISPO（国際義肢装具協会）への参加と世界会議の誘致など、多くの成果をあげてきた経験によるものです。

石川先生は、浜村明德先生と、厚生労働省老人保健課の山本先生とともに3日間徹夜で地域リハビリテーションシステムの構築に取り組まれたこと、また、回復期リハビリテーション病棟の設置、在宅総合ケア体制の推進など、水面下における国の行政との連携努力の結果、多くの功績をあげてられました。

先見性と包容力で 地域リハの拠点をつくった

石川先生は、豊かな先見性と、素晴らしい包容力の中で、輝生会を創設され、輝生会の理念として「人間尊厳の保持」「主体性・自己決定権の尊重」「地域リハビリテーションの推進」「ノーマライゼーションの実現」「情報の開示」をあげられました。

この理念のもとにご存じのように、浅草のたいとう診療所をはじめとして、初台リハビリテーション病院、船橋リハビリテーション病院のほか、元浅草や成城の在宅総合ケアセンターなど多くの素晴らしい地域リハビリテーションの拠点をつくられ、職員は1,200人となりました。この間先生が常に大切にされていた“One for all, all for one”の合言葉のもとに、チームアプローチ、教育研修体制の整備、接遇、環境整備、おいしい食事、ハラスメントの禁止などが生きております。

石川誠先生、長い間本当に有難うございました。私は90歳となり、もうすぐ先生と再会できる日を楽しみにしております。それまで安らかにお休みください。

胸の中にある 厚いファイル

大田 仁史

日本リハビリテーション病院・施設協会
顧問



石川先生の 社会的功績は語りつくせない

多くの人の「個人ファイル」が私の胸のなかにあります。そのなかに分厚いものが何冊かありますが、石川誠先生のファイルも分厚い一冊です。リハビリテーション医療における社会的功績は、会長方が座談会で詳しく述べられると思いますが（本誌p.8）、おそらく語りつくせないものがあると思います。

私が最初にお目にかかったのは、石川先生が虎の門病院分院におられたときだと思います。あまりに昔のことで、はっきりはしません。それからしばらくたって、高知市の近森リハビリテーション病院（以下、近森リハ）に行かれる前かその後か、リハビリテーション看護や地域リハビリテーションのことで伊豆通信病院（現・NTT東日本伊豆病院）に来られた記憶があります。

虎の門病院分院に来る前に、長野県の佐久総合病院の若月俊一先生の薫陶^{くんとう}をうけ、脳外科医からリハビリテーション医へ移る決心をしたようです。都市にリハビリテーション病院がないことに疑問を持ち、縁があって近森リハに赴任されました。その時は都市型のリハビリテーション専門病院の構想を持っておられたようです。石川先生はリハビリテーションの看護体制を重視しておられ私は意を強くしましたが、少し変わった人だと思いました。その時すでに、虎の門病院分院から呼ぶ優秀な看護師の候補もあったようです。

石川先生に限りませんが、優秀なリハビリテ

ーション医には周囲に優秀な腹心のリハビリテーションスタッフが必ずいます。そのような人がいないと、大勢のスタッフを束ねていけないからです。石川先生にも、近森リハ、医療法人社団輝生会設立以後、盤石のごとく先生を支えるスタッフがいました。

「理念、システム、技術」ということを石川先生はよく口にしておられました。そして最後まで気になっておられたのが世のなかの回復期病棟関係の未熟なスタッフの研修だったと思います。

誰もついていけないほどの エネルギーと勢いを感じた

近森リハが動きだすころ、職員研修で病院に呼んでいただき、スタッフと遅くまで飲んだ記憶があります。退院患者を高知の室戸の方に訪問すると帰るのが真夜中になる、という話も伺いました。私も、訪問活動の経験はありましたけれど、それほど遠くは行ったことはありませんでしたので、すごい人だと感心したのを覚えています。

高校から大学にかけラグビーに青春を燃やし、背が高くいかにもラガーマンらしく、エネルギーで「One for all, all for one」の信念を感じました。

近森リハの経験とデータをフルに活用して回復期病棟を国に認めさせ、初台リハビリテーション病院（以下、初台リハ）を立ち上げ、全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会（現・回復期リハビリテーション病棟協会）設立の準備にかかわりましたが、その時の活動は誰もついてはいけ

ないほどのエネルギーと勢いを感じました。

医療法人社団輝生会は初台リハを皮切りに、在宅総合ケアセンター元浅草、同成城、船橋市立リハビリテーション病院、船橋市リハビリセンター、そのほか在宅総合ケアセンター成城には成城リハケア病院も併設しました。

先生はいつも病院やスタッフの「質」のことを話しておられ、そのことで昨年か一昨年かの機関紙『回復期リハビリテーション』に随分厳しいことを書かれていたので、真意を伺ったら「このぐらい言ってもダメなところが多いのです」と寂しそうな顔をされたのが印象に残っています。特に退院後のフォローがないことを嘆いておられました。おそらく、若月先生に「手術で思うような結果が出せなかったなら担当した患者の面倒は一生持つものだ」など、患者のフォローや地域医療を叩き込まれたことが、リハビリテーション医療の心構えに底流していたと思います。

急性期から地域展開まで 都市型で行うリハ医療

先生はいくつか、ご自身の活動のキーワードというか、信念を持っておられました。「地域医療」「看護体制」「都市型リハビリテーション」「医療経営」「リハビリテーションの普遍化」「セルフケア」など多岐にわたります。

リハビリテーション医療を急性期から地域展開まで、都市型で民間が行うという発想はここから出ています。近森リハ設立も初台リハ時代も同じです。在宅総合ケアセンター元浅草や在宅総合ケアセンター成城も先生の一連の構想の一部です。すべて先生の構想のキーワードにあるものです。リハビリテーションの普遍化のためには医療経営学の勉強は必須と言われ、公的機関で働き続けた私は何をすべきか頭を悩まし続けました。

石川先生のスライドやパワーポイントでの説明は極めて明晰でわかりやすく、いつもきちんと頭のなかで整理されていて感心していました。その発表で印象深く残っているのが、澤村誠志先生が

「地域リハビリテーション」をテーマに1992年神戸で開催された第29回日本リハビリテーション医学会です。シンポジウムか特別講演だったと思います。近森リハで退院後の患者をフォローしていく内容です。退院直後は頻回に、次第に頻度を少なくしていく図でした。病院がきちんとリハビリテーション的フォローをするのは当然という趣旨の発表でした。

船橋市立リハビリテーション病院設立時に経営母体が市であることで、相談を受けたことがあります。船橋市とは医師会や行政と深くつながり、強い協力関係を持っておられました。船橋市でシルバーリハビリ体操指導士の養成事業を始めるときは、2年ほど時間をかけ用意周到に計画しておられました。「官職民」を巻き込んだ事業で船橋市の地域医療構想を展開されたようです。そのご縁で、今でも船橋市にお邪魔します。

2020年11月28日、船橋市の市民公開講座でお目にかかったのが最後になりました。そのときは市民への挨拶の声もしっかりしておられ、健康は少しずつ回復されていたようにお見受けしました。エレベーターで我々二人になることがあり、「先生はいつも背中がしゃんとしていてうらやましい」と先生の背中に手を当てましたら、とても痩せておられ驚きました。病気が進行し、相当体力を消耗して働いておられるとわかりましたが、私はそのことに触れることができませんでした。

私は「思いの半分はできる。やっていることの倍はできる」をモットーにしています。石川先生は大きな思いの半分にも到達しなかったのではないかと、そのような思いのなか、走りながら亡くなった気がします。もっともっとおやりになりたいことがあっただろうに、無念だろうと思います。

私のなかの「石川誠ファイル」があまりに厚く、また、10歳も若い先生の追悼文を書くとは夢にも思っていませんでしたので、何をお話すればいいのか迷うだけです。逆さまではないかという思いだけです。

本当にお疲れ様でした。安らかに眠りください。

追悼 座談会



浜村 明德

日本リハビリテーション
病院・施設協会 名誉会長



栗原 正紀

日本リハビリテーション
病院・施設協会 名誉会長



斉藤 正身

日本リハビリテーション
病院・施設協会 会長

8月中旬、新型コロナ感染拡大の緊急事態宣言発令下において、残念ながら直接の対面は叶わなかったが、長年、石川氏と親交の深かった浜村明德名誉会長、栗原正紀名誉会長、斉藤正身会長をオンラインでつなぎ、リモートでの追悼座談会を実施した。なお、進行役は、斉藤会長が務めた。

訃報に接して——

斉藤：私自身、いまだに、石川さんが亡くなられたという現実が、受け止めきれません。これはお2人も同じだと推察します。ただ、石川さんの性格からして、暗い感じになるのは好まれないと思いますから、今日は、できるだけ明るく、石川さんとの思い出を振り返りたいと思います。いまさらですが、呼び方は“石川さん”でいいですね。

栗原：そうですね。“さん”でいきましょう。

斉藤：では、まず石川さんの訃報にあたり、どうお感じになりましたか。

浜村：私が石川さんと最後に会って話をしたのは、一昨年（2019年）の11月です。私と彼とは、回復期リハビリテーション病棟協会のセラピストマネージャークースのなかの「リハビリテーションマインドⅡ」という講義を毎年、2人で担当していました。それが終わった後、控室で1時間くらい雑談

をしたんです。関係者もいるなかで、我々2人が昔話をして、それを周りも一緒に聞いているというような、そんな時間でした。石川さんはいつも忙しくて時間に追われていましたから、たいてい講義が終われば「じゃあ、お先に」なんて言って慌ただしく帰っていたんですが、あのときは、珍しく残っていました。

ひとしきり話をして、私は小倉へ戻る飛行機の時間が近づいてきましたので、「そろそろ帰るよ」と、場を切り上げて立ち上がったんです。そのときの彼の顔がね、妙に記憶に残りました。私をじっと見つめるような感じで、別れた後も、なぜか気になりました。もちろん、当時、私は石川さんの病気のことなど何も知らなかったですし、あまり深く考えたわけではないのですが…。ただ、今回の訃報に際し、改めてあのときの顔が非常に印象的に思い出されます。

まさか、こんな座談会をするとは——

栗原：私は少し前にも親友をがんで亡くしまして、その上、石川さんまでも…。なんというか、とても受け入れがたい気持ちです。以前、浜村さんも一緒のときだったと思いますが、「歳をとって、脳卒中で倒れるのががんになるの、どちらがいいか」という話をしたことがありました。その

とき、石川さんは「俺は、がんかなあ」と答えたんですね。それで、私は「石川さん、がんで亡くなるのは、かっこよすぎますよ」と言ったんです。要するに、脳卒中で倒れ、命はとられないまでも後遺症を抱え長生きするより、がんは余命宣告をもって命をとられる反面、最期まで尊厳が保てるから、というわけです。あのときは冗談半分で言っていた“死にざま”というものを、今回、まさに現実に見せつけられ、強い衝撃を受けています。正直、このような追悼座談会など、やりたくないのが本音です。

斉藤：同感です。まさか、この3人で、このようなテーマの座談会をすることになるとは、夢にも思いませんでした。石川さんのご病気のことは、我々、誰も知らされておりませんでしたから。

栗原：闘病されていたのは、ここ2、3年だと思いますが、この間、法人内でも完全なる箝口令^{かんこうれい}が敷かれ、情報が外に漏れることは見事にありませんでした。だからこそ、余計にショックでした。

私が知ったのは、直前です。高知におられる、ある方からの連絡で、なんとなく奥歯に物が挟まったような感じの物言いだったので、私が強く促したら、ようやく観念し白状してくれました。当人からは「絶対に言うな」と厳しく止められていたらしいです。石川さん独特の気遣いでしょうかね。ただ、それを聞いて、私はとても独りでは抱えきれず、浜村さんに伝えて、浜村さんが斉藤さんに知らせたんですね。その後まもなくして訃報を受け、私は、たまたま翌日に東京へ行く用事があったため、つてをたどってご自宅にうかがいました。そのとき、ベッドに寝ておられた彼の顔も拝見しましたが、なんというか、崇高なまでに清々しい死に顔で、まだ瞼の裏に強烈に焼きついています。

斉藤：私は、石川さんの訃報を聞いて、ただただ驚きました。まさか、とも思いました。いま栗原さんがおっしゃったように、少し前に身体の状態が悪いという話は伝え聞いていたわけですが、それでも、ショックで言葉が出ませんでした。いて

もたってもいられず、すぐに駆けつけました。

おそらく、それも石川さんのご意向だったと思うんですが、身内の皆さんは、その場ではすごく明るくふるまわれていて…。そんななかで、棺に横たわる石川さんのお顔は本当に、栗原さんのおっしゃるとおり、凛々しくて。確かに、ああいふ死に顔は見たことがないかもしれません。改めてすごい人だな、と思いました。

石川さんは、ご自分の弱い部分は絶対に見せない方でしたけど、何度か「いいなあ。斉藤さんは若くて」と言われたことがありました。きっと、まだまだやりたいことがおありだったでしょう。こんなにも早く、あっという間に逝ってしまわれるとは…。それでも、考えてみれば、その逝き方も潔くてかっこよくて、石川さんらしいのかもしれません。

出会い、その後の関わり

斉藤：それぞれの石川さんとの交流のきっかけをお聞かせいただけますか。

石川さんのおかげで、いまがある

浜村：この3人のなかでは、私が一番古いつきあいになるでしょうか。石川さんに最初に会ったのは、1990年前後だったと思います。確か、何かの研究事業の委員会で、場所は東京ステーションホテルの会議室。澤村先生（澤村誠志当協会名誉会長）が「高知にすごい男がいるから、紹介する」とおっしゃって、引き合わせてくださいました。いまでもよく覚えています。私は窓を背にして座っていて、石川さんはその斜め前に座っておられた。このときのことを後から石川さんが言うには、私がその委員会の最中に机を叩いて怒った、と。「それがすごく印象的だった」とか言うんですが、これは、私は記憶にありません。石川さんが面白おかしく脚色してるんじゃないかと思うんですが（笑）。とにかく、そこから意気投合して、交流が深まっていきました。私も石川さんの

いる高知によく出かけましたし、彼もたびたび、当時私がいた長崎に来てくれました。

そんななかで、あるときから、会うたびにお酒が入ると、私に「おい浜村、国立病院を辞めろ」と、言うわけです。しまいには、小山先生（小山秀夫兵庫県立大学名誉教授）も加わり、2人で「小倉リハビリテーション病院へ行け」と、追い立てる。私としては、そう言われても、なかなか簡単なことではないですし、一度はお断りしたんです。結局、1998年に福岡の小倉に来たわけです。いま思えば、石川さんと出会っていなかったら、私は小倉に来ることはなかったと断言できます。ですから、いまの私があるのは、石川さんのおかげといえるでしょう。いつも私をリードしてくれていました。



栗原：私の石川さんとの出会いのきっかけは、浜村さんがつくってくださいました。以前、私は救急医療のシステムやデータバンク構築のための追跡調査をしたりして、あるとき、それをまとめたものを浜村さん

に見せたことがありました。そうしたら、「同じ脳外科出身で、似たようなことをがんばっている医師がいるから、彼に見せてみたら」と言われたんです。それで、当協会の研修会か委員会か、はっきりと覚えていませんが、「浜村先生にご紹介いただいて…」とご挨拶して、石川さんに資料を見せたのです。そのときは「ふーん」という感じで、特になんのリアクションもなかったんです。こちらとしたら、少し肩透かしを食らった感じでした（笑）。そうしたら、その後、当協会の急性期関連の委員会に、委員として呼びがかりました。当時の私は、急性期リハビリテーションなど、まったくの素人だったのですが、なぜか声をかけてくださった。

それからしばらくして、「高知に来てくれ」と

言われ、私も浜村さんと同じで、最初は拒否していたんですが、結局、2001年に近森リハビリテーション病院の院長となります。そして、その5年後、いまの病院（長崎リハビリテーション病院）をつくるに当たって、場所を山の上か街なかか、最後まで決めかねていたときも、石川さんが私の背中を押してくれました。たまたま長崎に来られた石川さんが、いまの場所を見て、「何、悩んでるんだ。こっちだよ」と言ってくれたのが、決断のきっかけです。

思えば、私の医師としての転機には、常に石川さんがいた。浜村さん同様、私も石川さんがいてこそ、いまの私だと思つづく思います。

浜村：栗原さんのことを、石川さんは、すごく頼りにしていたと思うよ。

栗原：出自が同じ脳外科だということもあったのかもしれない。そういう部分での視点は、互いに通じるものがありました。

「この人についていこう」と思った

斉藤：私がリハビリテーションの世界へ進んだきっかけは、1992年に三重県四日市で開催された「老人の専門医療を考える会」のシンポジウムで、浜村さんの講演を聞いたことでした。石川さんとは、その2年後くらい。1994年頃だったと思いますが、同会の初代会長の天本宏先生が、「高知に、すごく面白い先生がいる」と、石川さんを紹介してくださいました。指定された場所に行ってみると、やけに都会的な雰囲気の方がいて、それが石川さんでした。私のほうが10歳ほど年下でしたから、後輩然として「私もいま、リハビリテーションをやり始めたところなんです！」などと話しかけ、そこからご縁がつながりました。

その後、高知の近森リハを訪ね、その完成度に驚きましたが、特にすごいと思ったのが、「いごっばち」という老健施設。ショートステイ専門の施設なのですが、そんな発想、私には思いもつかなかったので、「なんて斬新な発想をする人なんだ」と、感心しました。在宅をベースに、老健



施設があって、そこにつなぐためのリハビリテーション病院があって、という流れを見て、「ああ、自分がめざすものは、これだ。この人についていこう」と思った

ものでした。

私もお2人と同じで、いまの自分がやっている仕事のきっかけをつくってくれたのは、石川さんです。

人となり、人物像

斉藤：私は、4人のなかでは一番年下ということもあり、3人のことは勝手に兄貴と思っているのですが、何ぶん生意気な弟でしたので、一番上の石川さんを困らせることも多かったと思います（笑）。浜村さんや栗原さんには、いろいろとご迷惑をおかけしました。

さて、続いては、そんな我々から見る石川さんの人となりについて、何か印象的な言葉やエピソードを交えてお話いただけますか。

栗原：以前、近森リハの古い資料を探していて、2000年代初頭のビデオ映像を見たことがあります。そのなかに、在宅診療の場で高齢の患者さんに話しかける石川さんが映っていたのですが、なんともいえないやさしい笑顔をしているんです。石川さんは、非常に厳しい部分もありましたが、一方できめ細かい気遣いの人でもあった。そして、人に対して、とてつもなく寛容でした。そういう彼の人となりを知った上で見ると、すごく印象的な笑顔です。あれが石川さんの本当の姿かな、と思います。

先程、斉藤さんが石川さんのことを“都会的”と言っていたけれど、私も同感です。一度、高知で開催された研究会の後の飲み会で、ある理学療法士が私のところに来て、「栗原先生は、浜村先生

も石川先生もよく知ってますよね。それぞれ、どういう方ですか？」と、聞いてきたことがありました。もうかなりお酒の入っていた私は、「浜村さんはどてらを着たやくざで、石川さんはスーツを着たやくざだよ」と冗談めかして言ったんです。要するに、浜村さんは自分たちと同じ田舎者だけど、石川さんはシティボーイだと言いたかったんですね。そうしたら、その後、どこかでそれを聞きつけた石川さんが、私のところに来て、「俺だって、どてらを着たやくざだろうが」と言ったんです（笑）。自分も皆と同じなんだ、という意味だと思うのですが、なんだかうれしくて、あの言葉は、よく覚えています。

宴席では、きまって『兄弟船』を

浜村：私は、なんといっても『兄弟船』でしょうか。澤村先生が著書のなかで、自分が引き合わせた2人が、狙いどおり意気投合したと書いておられます。いろいろな仕事を一緒にやり、宴席で仲良く歌まで唄っているということで、曰く、「忘年会で2人が肩を組んで『兄弟船』を熱唱する姿に、私は“勝った”と実感した」と――。澤村先生特有の表現ですが（笑）。

確かに、私と石川さんは、最初から気が合ったというか……。もちろん、私がそう思っていただけだったかもしれませんが、我々は、澤村先生を水戸黄門になぞらえ、自らを「助さん・格さん」と称して活動していました。そして、酒席では、本当によく『兄弟船』を唄ったものです。

今回、探してみたら、そんな写真もけっこう出てきました。また、同様に宴席の写真ですが、皆でネクタイを鉢巻きにして、そこに割り箸か何かを挟み、カラオケで盛りあがっているものも見つけたので、お恥ずかしながら、誌面にご提供します。





■奥でマイクを持ち歌うのが澤村名誉会長。右下、こぶしを振り上げているのが浜村名誉会長。その左が石川氏。確かに、鉢巻きはしていない。写真右下にかすかに1993年5月の日付が。



■『兄弟船』を歌う浜村名誉会長と石川氏。
(右ともに撮影年・場所不明)。

ただ、よく見ると、石川さんだけ鉢巻きをしていないんですね。そのあたりが、彼のシティボーイたる所以でしょうか。でも、楽しそうに笑っています。懐かしいですね。

斉藤：よく覚えているのは、私が自分の病院のリハビリテーションセンターを新しくして、その後石川さんも初台の病院のリハビリテーションセンターをつくろうとしたときのこと。石川さんが聞いてくるんですよ、「斉藤さんのところは何㎡？」って。で、結局私のところより100㎡大きくつくって、後から、うちの病院に来たとき、職員に「ここも立派だけれどもね、うちの病院もここに負けないのをつくったんだよ」と、ニヤツとしながら得意げに言うんです。そのとき、思いました。ああ、この人は、なんでも勝負なんだな、と（笑）。

浜村：なんというか、負けず嫌い、というのはあったね。もともとがラガーマンだから。

仕事ぶり、そこに向かう姿勢

斉藤：少し視点を変えて、仕事の話を。お2人の目から見た、彼の仕事ぶりや仕事に対する姿勢について、お話いただけますか。

超人的な活動と圧倒的なデータ量

浜村：私からは、まだ知り合って間もない頃、1992年5月に、神戸で開催された第29回日本リハビリテーション医学会学術集会のときのことを挙

げたいと思います。同大会は、澤村先生が大会長で、この回は、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士などのコメディカルも発表できる学会となった記念すべき回でもありました。たぶん、石川さんが大きな学会で自分の仕事のことを公に発表したのは、これが最初だったのではないのでしょうか。

発表したのは、「地域リハビリテーション活動の現状と課題」というテーマのシンポジウムにおいてです。座長が我々の恩師、大田先生（大田仁史当協会顧問）と竹内先生（竹内孝仁国際医療福祉大学教授）で、私もシンポジストとして一緒に登壇しました。

石川さんの講演タイトルは「継続医療室活動（訪問活動）の現状と課題」。いまでも鮮明に覚えています。当時、石川さんは病院を運営しながら、患者さんを診て、土日には訪問診療、往診をするという、ちょっと超人的な活動をしていたわけですが、何がすごかって、そのデータ量がもう他を圧倒していました。我々が100や200の次元の話をしているのに比べ、彼は1,000件とかですね。はるか桁違いの量をこなし、かつ、的確にその分析をしていて。我々にとっては、非常にインパクトのある発表でした。このときの写真がありますが、30年前ですから、石川さんは40代。働き盛りの凛々しいお顔が写っています。

そこでのまとめとして、石川さんは「在宅重度障害者も、支援体制がしっかりしていれば、いきいき生活することが可能である」と、断言してい

ます。そして、そのために必要な在宅医療の3本柱として、①24時間体制の往診、②緊急一時入院、③訪問看護——を挙げている。すでに自分が実践済みの活動からデータを揃えて提案しているわけで、もうこのときから彼の“まずは行動ありき”というスタイルが貫かれていたんだと改めて思います。

栗原：石川さんは、ものすごく数字に強いんですよ。僕も弱いほうではないと思ってはいたけれども、石川さんには叶わない。あれほど数字に強い人は、ちょっといないのではないかな。でも、そんななかで、やはり大事にしていたのはデータでした。それも、自分の実績に基づき集約した確かなデータです。

壮大な計画をサラッとやってのけた

斉藤：いま、お2人の話を聞いていて、思い出したことがあります。以前、「斉藤さん、いまやっていることがどこにつながっているか、考えてやっているかい？」と聞かれたことがあったんです。私は、そのとき「いえ、もう目の前のことだけで精一杯です」などと答えたのですが、石川さんは「あのね、いまやっている仕事は、必ず次につながるんだよ」と、おっしゃった。それは、いまやっていることがデータとして蓄積されて、それが次のアクションにつながる、ということなのでしょう。

そもそも、なぜ石川さんが前述の



■1992年、「第29回日本リハビリテーション医学会学術集会」での様子。右が浜村名誉会長、その左が石川氏。



「老人の専門医療を考える会」に入ったかというのと、きっと、当時から、高齢者医療をやっている医師たちの目を、もっとリハビリテーションに向けさせたいという思いがあったんだと思います。

「リハビリテーション専門病院の医師たちだけでは、リハビリテーションの未来はない。高齢者医療の先生たちがリハビリテーションを中心とした医療をやってくれば、流れが変わるんだ」と、よく言われていました。

そして、回復期リハビリテーション病棟をつくるに当たっては、「高齢者医療に携わる人たちの力を結集するんだ」とも言っていて、私は、なんと壮大な計画かと思って聞いていましたが、実際、サラッとやってのけましたよね。事実、回復期リハビリテーション病棟が誕生したとき、老人病院の先生方もリハビリテーションを前面に押し出すような展開を始めてくださっていましたから。その背後にいらっしゃったのは、まぎれもない、石川さんです。老人病院の跡取りたちを、ご自分の病院で預かって教育して戻すなど、そういうこともされていました。それはもう、すごいとしか言えません。

浜村：石川さんは、我々が考えるよりも、とてつもなく広く長いスパンで物事を考える力がありました。それには、いつも驚かされていました。

栗原：石川さんが、つくづくすごいと思うのは、東京の虎の門病院から高知の近森リハへ行かれて、そこで自分の理想とするリハビリテーション病院や老健施設をゼロから整備していったわけじゃないですか。後に、近森正幸理事長が言っていました、「石川さんには50億かけた」と——（笑）。近森理事長のその太っ腹もたいしたものですが、そうさせる石川さんのプレゼンテーション力や説得力、そこに至る先見の明がね。とても太刀打ちできないですね。

斉藤：セコム創業者の飯田亮氏も、きっと同じものを感じて、支援したんでしょうね。そして、初台リハビリテーション病院ができた。

浜村：仕事をする姿をそばで見えてきて、悔しいけ

れども、石川さんには、とうてい凡人に真似のできない華があると感じていました。天性の輝きというか、人を惹きつける独特の力がある。これは努力で身に着くものではなく、もって生まれた魅力、才能でしょうね。

リハビリテーション医療における功績

斉藤：石川さんの功績は、もう皆さんの知るところだとは思いますが、いま改めて話すとしたら、どんなところですか。

回復期リハビリ病棟の生みの親

浜村：それはもう、先ほどから話に出ています。やはり、回復期リハビリテーション病棟の生みの親としての功績が大きいと思います。

誕生秘話を簡単にお話しますと、1995年くらいから、澤村先生もリハビリテーションの治療拠点としての専門病棟の必要性を当時の厚生省に訴えていらして、その推進に当たってのリーダーが石川さんでした。いろいろと働きかけたのですが、一時はなかなか理解が得られず、四面楚歌という状況にもなったのです。

そんなとき、リハビリテーション前置主義という考え方が介護保険のほうから聞こえてきました。地域包括ケアシステムなる概念が少しずつ注目を浴び、それも関係していたのでしょう。これが功を奏しまして、リハビリテーションの重要性が注目されるようになってきました。それが、1997、98年あたりだったと記憶しています。そこから、徐々に機運も高まってきて、流れが変わったと感じたのは、1999年。そして、その年の暮れ、まさに誕生の直前ですけれども、「浜村、回復期リハビリテーション病棟、開設されるのは間違いないよ」と、電話がかかってきたのを覚えています。

当時、石川さんが掲げた回復期リハビリテーションの3本柱は、皆さんご存知のとおり、①ADLの向上、②寝たきり防止、③家庭復帰――



■2007年、埼玉で開催された「リハビリテーション・ケア合同研究大会」の際に4人で撮った記念写真。

です。介護保険制度が生まれた2000年の時点で、こういう理念を掲げるのも、いかにも石川さんらしい。やはり、臨床をきちんとやってきた人でないと、これは出てこないと思います。

それから、もう1つ。回復期リハビリテーション病棟の報酬には、当初から「在宅復帰率」という単語が出てきます。いまでこそ当たり前の評価基準になっていますが、これをアウトカムの指標に制度としてとり入れたのは、たぶん回復期リハビリテーション病棟が最初じゃなかったかと思います。そこも、数字に強く、先見の明のある石川さんならではの感覚だと思います。

栗原：私は、回復期リハビリテーション病棟の誕生は、地域医療そのものを変えてしまうくらいのきっかけだったと思います。新参者だった回復期リハビリテーション病棟が、医学会で認められていく過程を一步引いたところで見させていただいてきましたが、それは並大抵の胆力ではなかったと思います。それでも、どんどん味方を増やしていく石川さんは、ある意味では、世のなかのありようを変えていったんだ、とつくづく感じますね。

チーム医療を大切に、根づかせた

斉藤：私は、リハビリテーション医療に“チーム”の概念を根づかせたのも、石川さんの功績だと思います。それまでのいわゆるピラミッド型のヒエラルキーをとっ払い、互いに「さん」で呼び合い、フラットな関係でいこうとされた。それが



■2017年、都内の寿司屋で、小山秀夫先生(右から2人目)を交えて。

チーム医療なんだ、と。

栗原：「One for all, all for one」ですね。石川さんはラグビー部出身だから、チームプレーのラグビーの精神が根底にあるんですね。あと、近森リハでは、懇親会の終わりに、いつも皆で輪になり肩を組み、ハウンドドッグの『フォルテッシモ』を唄うという慣習もありました(笑)。石川さんは、チームの“あり方”をいつも追求していたように思います。ちなみに、フォルテッシモは、葬儀の際に流れていたビデオでもかかっていたんですよ。彼が大好きな歌でした。

それから、チームということに関して言えば、彼自身もいろいろなインタビューなどで答えていますが、なかでも特に看護に対するリスペクトが強かったですね。私も、ちょうどいま看護における現象学を勉強しているのですが、それは、突き詰めていくとまさにリハビリテーションなんですね。そういう意味で、石川さんも早くからリハビリテーションにおける看護の重要性に気づいていたんだな、と思いました。

尽きぬ思い出

斉藤：いろいろありすぎて、きりがありませんね。ここからは、特にテーマをくくりません。これまでに言いそびれたことなどがあれば、どうぞ。

浜村：1つ、悔やまれることがあります。1999年に日本リハビリテーション病院協会(当時)が受託し、発表した、『地域リハビリテーション支援

活動マニュアル』というのがあるのですが、昨年、その改定事業を再び当協会が受託しました。

実は、このマニュアル、私にとっては非常に思い入れ深いものです。というのも、1999年版の作成を中心になって担当したのは、石川さんと私だったからです。当時、私は小倉に赴任したばかりで、いろいろと大変な時期だったのですが、昼は通常業務、夜はそのマニュアルづくり、という生活をしていました。そして、いよいよ締め切り前の最後の仕上げ、というとき、厚生省のダメ出しを受けながら、石川さんと2人、小倉と東京で、メールと電話でやりとりしながら、48時間ぶっ通しで、まさに文字どおり寝ずに仕上げたという経緯があるのです。辛かったです。いまとなっては忘れられない思い出で、このときにも、石川さんの胆力、突破力を見せつけられました。

そんなマニュアルでしたから、昨年、改定を依頼されたときも、迷わず石川さんに声をかけました。ただ、事務局を通して連絡をとってもらったのですが、石川さんの返事は、「若い人に任せたら」とのことでした。それを聞いて、私から直接電話しようかな、とも思ったのですが、石川さんがそう言うからには、それなりの意図があるのだろうと、もうそれ以上、私から連絡するのはやめておきました。きっと、もう病気がかなり辛かった頃だったのでしょう。なんの事情も知らず、のんきに頼ってしまったこと、気になったのに連絡をとらなかったこと、いまとなっては悔やまれます。

お酒も強かった。常にポジティブだった

斉藤：私は、4人揃っての思い出として、『高齢者リハビリテーション医療のグランドデザイン』

(2008年、青海社)を書いたことを言っておきたい。今回、改めて見てみたら、当協会の編集になっていますけど、著者は、まさにこの4人なんです。皆でひざを突き合わせて、ああだこうだと話し合ったのを覚えています。それで、この本が

発刊された翌年でしたか、打ち上げと称して、鹿児島温泉旅館に4人で行ったんですね。4人でお酒を飲んで、露天風呂に入って…。童心に返った気持ちで、あのときは本当に楽しかった。

栗原：また、石川さんはお酒も強くてね。でも、酒を飲んでも、ポジティブ。ネガティブなことは、ほとんど言わなかったですね。いろいろ逆風も受けてきたと思うのですが、石川さんの口から悪口を聞いたことは一度もありませんでした。それも見習わないといけないですが、なかなかできるものではない。本当に寛容な方でした。

石川さんから若い人たちへのメッセージ

斉藤：最後に、石川さんが残された、若い人々へのメッセージを、浜村さんからお願いします。

浜村：冒頭でもお話した、一昨年のセラピストマネジャー研修会における「リハビリテーションマインドⅡ」の資料から石川さんの思いを推察して紹介したいと思います。昨年はコロナ禍により中止になったので、それが最後の石川さんの教えになります。

石川さん

あなたがいたから、日本のリハビリテーションは変わった。
あなたは、夢を持ち続けて生きていた。
ある時はスタッフに、ある時は患者さんや地域の人々に問いかけ、
そして、行政や政府に働きかけてきた。
あなたは、ものづくりが超一流だった。
気持ちを切らさず、それまでなかったものに、チャレンジしてきた。
あなたには動き続ける無限のエネルギーがあると思っていた。
きっと、あなたの魂は後輩たちが引き継いでゆくだろう。
石川さん、あなたのおかげで日本のリハビリテーションは変わったよ。
人生は出会いの繰り返しだが、求めていなければ自分と絡めることはできない。
石川さんがいたから、私は今日までがんばれた。
長い間付き合ってくれて、ありがとう。そして、ご苦労様。

浜村 拝

石川さんが若い世代に伝えたかったのは、①障害のある人々とともに、正義を追求するリハビリテーション、②多職種協働のチームアプローチ、③利益に走らないリハビリテーション医療の追求、④時代に求められるものに挑戦するリハビリテーション——です。私なりに、ひと言でまとめると、「若者よ、障害のある人々とともにチャレンジせよ！」ということでしょうか。彼は、近年「最近の若者は元気がない」と気にしていました。

もうすぐ今年のセラピストマネジャー研修会の講義が近づいてきます。石川さんと2人で受け持つ講義、その後のざっくばらんな参加者との質疑応答は、私にとって、毎年、仕事でありながら、とても面白く、楽しい時間でした。石川さんも楽しそうでした。もう二度と石川さんと講義をすることがないと思うと、本当に寂しい限りです。

斉藤：ありがとうございました。座談会の締めとしては、浜村さんが書いてくださった石川さんへの手紙（下記）で代えさせていただきます。



■4人による共著の『高齢者リハビリテーション医療のグランドデザイン』（2008年、青海社）の発刊の打ち上げを兼ね、鹿児島温泉旅館にて撮った写真。
この写真は、栗原名誉会長が、石川氏の霊前にも捧げた。